HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	憬興『無量寿経連義述文贊』の出典から見た編纂方針
Author(s)	李, 乃琦
Citation	研究論集, 17, 55（左）-66（左）
Issue Date	2017-11-29
DOI	10.14943/rjgsl.17.l55
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/67973
Type	bulletin (article)
File Information	17_003_li.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgsl.17.l 55

憬興『無量寿経連義述文賛』の出典から見た編纂方針

李　　乃琦

要　旨

無量寿経連義述文賛（以下,「述文賛」と略す）は 700 年頃に編纂され，無量寿経についての解説書である。著者が憬興で，7 世紀の朝鮮の僧侶である。述文賛には出典名が明記されている注釈は 26 条ある。そのため，編纂時に内典と外典を利用したことは明確である。先行研究によると，述文賛が玄応音義・玉篇・切韻を利用したのはほぼ定説になった。また，古代韓国の漢字音を反映していることも論じられている。しかし，筆者の調査によると，述文賛は玄応音義を引用したのは確かであるが，玉篇との関連性を再び検討する必要がある。

本論では，引用された可能性がある諸本と対照するため，述文賛に出典名が記されている項目と反切で音注を表している項目を研究対象として扱う。先に，それらの注釈の出典を諸本と比較した上で，述文賛の編纂方針を論じる。その結果は次の四点にまとめる。①玄応音義の重視：述文賛には玄応音義にのみ見られ，他本に見られない注釈が 22 例ある。このことにより，憬興が玄応音義を重視することは明らかになった。②重層的な構造：述文賛の成立時に一種類のみの文献をそのまま引用したのではなく，多数の本を組み合わせて重層的な構造を持つ注釈が完成した。③述文賛には直接引用が 6 例あり，その中玉篇からの引用が 1 例しかない。さらに，河野（2014）では,「憬興の音釈の中には『玉篇』に基づくものと確定できる例がない。」と述べた。玉篇が残巻であるため，照合するのは不可能であった。しかし，筆者が述文賛を篆隷万象名義と比較した結果，一致する内容が見られない。そのため，玉篇が明記している 1 例の注釈が直接引用か間接引用かは容易に推測できない。④述文賛には出典不明の注釈が 12 例ある。現存する文献を調べ，近似する内容がないため，憬興が編纂する内容と考えられる。

1　はじめに

憬興は古代朝鮮の法相宗の僧侶である。伝不明であるが，新羅国・神文王，文武王の命により国師・国老（681 年）として活躍した記録があるため，7 世紀後半の人だとされる。著書が多数あるが，ほとんど佚書で，現在残されているのは『三弥勒経疏』一巻と『無量寿経連義述文賛』三巻である。

『無量寿経連義述文賛』（700 年頃撰。以下，『述文賛』と略す。）は『仏書解説大辞典』によると，「無量寿経を注釈せるもの，連義述文賛とは諸師の義解を引き連ねて，此経の文意を述べ教法の弘傳を賛助する。」[1] 目的で書かれたもので，『無量寿経』についての解釈書である。本書の序文によると，「經曰佛説無量壽經上者。述云將講此經略作三門。一者來意二者釋名三解本文。」とあって，本文を「来意」・「釈名」・「解本文」の三つの側面から読み解いている。述文賛では「経曰〇〇者」あるいは「経曰〇〇至〇〇者」という形式で解釈する経文の範囲を示し，その後に注文が続く。注が施された注文は全 486 条を数える。

憬興は『無量寿経』の経文を解釈するために，述文賛において多数の内典と外典を引用した。その中，玄応音義・玉篇・切韻を利用したことは，諸氏の研究によって，ほぼ定説となった。しかしながら，筆者の調査によると，それらの内容の出典について再調査する必要があると思われる。本論では，述文賛の出典文献に着目し，それらによって編纂方針を解明する。

2　先行研究

李（2008）「七世紀末葉の韓国語資料―璟興撰『無量寿経連義述文賛』の注釈を中心に」では，述文賛の注文を字形・字音・字義に分け，別々に分析した。まず，字形においては，全 13 例の中に，7 例が玄応音義と一致するかもしくはそれに最も近い注釈がある。その他の 6 例は憬興が自ら注を施す内容であり，全体の 46％を占める。さらに，述文賛は「字形論すなわち文字論の研究が始まったことを知らせる最古の実証的な資料。」であると指摘した。また，字音においては，53 例の中に 23 例の反切は憬興が記述した独自的な反切であり，全体の 43％に達する。李（2008）はさらに，その中の 11 例の反切が古代韓国の漢字音を表し，郷札表記法に影響を受けたと推測した。このことから「憬興特有の反切字が韓国固有の伝統的音借表記字を基礎としていることを意味して」おり，「憬興の時代に既に韓国の古代漢字音が確定していたことをも暗示している。」とも推測した。最後に，字義においては，述文賛では施された字義が 230 例余りにおよび，仏経の専門用語以外に，日常語も多数存する。その中の 9 例が，引用された内容ではなく，憬興が記述したものであると述べている。

---

[1] 『仏書解説大辞典』第 10 巻（小野玄妙編）大東出版社，1933 年。

池田（2012）「憬興『無量寿経連義述文賛』所引外典考」では，述文賛の引用内容については，原典から直接引かれたのではなく，玄応音義と玉篇からの孫引きであると結論づけた。さらに，述文賛の外典の引用部の 26 例を列挙して別々に分析した。その結果，前者を重用していたらしく，後者の利用は補助的で，また陸法言の『切韻』を利用したと述べた。述文賛の出典において，「文章の一致のほか，玄応音義か玉篇か択一の論拠を見出す」を目指し，外典を引いている 26 例の注文を次の五つのグループに分けて分析した。（実際の出典の指摘は 20 例であり全例ではない。）

a　述文賛・玉篇・玄応音義の直接比較が可能な例（ 3 例：いずれも玄応音義から引用）
b　玄応音義の利用（ 7 例）
c　玉篇の利用（ 4 例）
d　玄応音義・玉篇利用の序列（ 2 例）
e　陸法言切韻の利用（ 4 例）

河野（2012）「善珠撰述仏典注釈書に見る漢語読解の方法 ── 憬興撰述注釈書との比較を通して ──」では，述文賛と善珠『成唯識論述記序釈』および『因明論疏明灯抄』を研究対象とし，両者の「漢語読解の方法の重なりと違い」を確認した。まず，河野の統計によると，述文賛には漢字 57 字に対して反切 61 例と直音 1 例ある。それらを分析した結果は次の通りである。原本系『玉篇』との一致：13 例。玄応音義との一致：29 例（うち 14 例は原本系『玉篇』や切韻系韻書には一致する音釈が見られないもの）。切韻系韻書との一致：13 例（うち 2 例は原本系『玉篇』や玄応音義には一致する音釈が見られない）。先述の李（2008）では，「伝統的借字と一致する憬興の反切字」としてあげる字は河野氏が「玉篇をはじめとする中国資料や，善珠ら奈良・平安期の注釈書中に見える反切用字として使用されているものでもある」と異論を述べている。先行する中国利用に一致しない音釈が 31 例あり，それらについては，「いまだ明確ではない」と論じた。次に，両者の編纂方法について，「徹底した注釈態度：注釈文中の漢字に対してさらに注釈を付す」，「字形の異同への注意」と「諸本間の本文対校，校勘」の三点を指摘した。

伊藤（2014）「憬興撰『無量壽經連義述文贊』特異反切研究―百済漢字音の干渉を中心に―」では，述文賛に含まれている 53 例の反切を抽出し，その中の 11 個の反切が中古音と異なる発音を持つことを指摘した。その分析を通して，11 個の反切のうち 7 個の発音が百済漢字音を反映していると結論付けた。その根拠を次のように指摘した。

> これらの反切が示す特徴と既存の研究結果を比較した結果，百済漢字音には①見母と溪母が共に/ㄱ/で現れ，②模韻の一部が/와/もしくは/아/で反映され，③庚三開韻と青韻が/양/で反映され，④蟹攝開口韻が中世漢字音より広い範囲で/애/で反映されるという特徴があることが明らかになった。/ㅋ/の不在を示す①は中期朝鮮語に通じる特徴である。②と③は百済漢字音の上古音的性格を示しているが，③が日本語の呉音やベトナム語漢字音

の古層にも見られるのとは対照的に，②は百済漢字音にのみ見られる特徴である。

その他に,「祚」の反切「之阿反」により，百済漢字音が中古音を反映することが明らかになった。伊藤（2014）はこれを「百済漢字音が新羅漢字音より新しい漢語音を反映していた可能性を示唆している。」ものとした。

以上の先行研究では，主に述文贊の字音と出典について論じた。字音においては，李（2008）・河野（2014）・伊藤（2014）では十分に検討され，多数の韓国古代漢字音が反映していることを結論づけた。出典においては，玄応音義・玉篇・切韻の利用を中心に，他に現存していない文献か，間接引用かと推測された。一方，述文贊の出典と編纂方針については，まだ検討する必要があると考えられる。本論では，述文贊の出典に基づき，成立時の編纂方針について論じる。

3　研究対象

述文贊は『無量寿経』の解説書であり，多数の文献に基づいていることが明らかになっている。その中では「経曰〇〇者」あるいは「経曰〇〇至〇〇者」という形式で解釈する経文の範囲を示し，その後に注文が続く。注文の中に，出典名が明記しているものの他に，反切も多数の文献から引用したと論じられている。本論では，出典の視点から編纂方針を論じるため，他の文献を参照した可能性がある内容を抽出して検討する。即ち，次の二種類である。（先行研究では，反切については多く論じたため，文献を参照した成立する可能性もあるし，独自音注の可能性もある。そのため，本論では反切の異同を研究対象外とし，反切に続く注文を研究対象として分析する）。

①全ての出典が明記している項目

②全ての反切がある項目[2]

4　編纂方針

第 3 章で抽出した内容を分析した結果を次の四点に分けて編纂を行うこととした。四点とは即ち，玄応音義の重視・重層的な構造・直接引用・独自性の発揮である。本章では，この四点について，各々に例を挙げて分析する。

4.1　玄応音義の重視

述文贊が編纂された時，玄応音義を利用したことはほぼ定説になった。これらの引用内容が玄応音義のみにあり，他の出典に見られいないものである。次に，すべて玄応音義を利用して

[2]「反切がある項目」とは，この項目には音注が施され，さらに反切で発音を表すものである。

成立した注釈を挙げる。（一致する内容に下線を引く）

(1) 聚落者，小郷曰聚，広雅落，居也，謂人所聚居也。

玄：〈聚落〉古文𨗉，二形，同。才句反。『漢書』：學官聚曰序，鄉曰庠。張晏曰：邑，落名也。韋昭曰：小郷曰聚。『史記』‘舜所居，一年成聚’是也。『廣雅』：落，居也。謂人所聚居也。『漢書』‘無燔聚落’是也。

(2) 蒙：又作曚，皆〈莫公反〉。蒙覆不明也。

玄：〈蒙昧〉字體作曚，同。莫公反。下莫對反。『易』云：蒙者曚也。謂曚覆不明。『廣雅』：昧者闇也。謂闇蔽無知也。『易』云‘蒙昧幼老謂不我求是也。

(3) 抵：〈都禮反〉。拒也摧也。

玄：〈抵言〉都禮反。拒也。謂抵拒推也。

(4) 突：〈徒骨反〉。觸冒也。

玄：〈唐突〉字體作搪揬二形，同。徒郎反，下徒骨反。『廣雅』：觸，冒，搪，衝，揬也。『字書』：揬，揩也。

(5) 貿：〈莫候反〉。三倉換易。

玄：〈貿粗〉莫候反。『三蒼』：貿，換易也。謂交易物爲貿也。

(6) 勂：〈與一反〉。樂也。

玄：〈婬佚〉又作勂，同。與一反。『蒼頡篇』：佚，蕩也。亦樂也。

(7) 僥：〈五彫古遶二反〉，徼遇也。謂求親遇也。

玄：〈僥値〉古堯反。『漢書』晉灼『音義』曰：徼，遇也。謂願求親遇也。

(8) 倖：〈胡耿反〉。非其所得而謂得也。

玄：〈僥倖〉古堯反，下胡耿反。謂非其所得而得之也。

(9) 煢：古文僬悗同。〈臣營反〉。獨也單也。

玄：〈煢悸〉古文惸，僬二形，同。巨營反。煢，單也。煢煢然無所依也。下渠季反。謂不定也，亦心動也。

(10) 尪：〈烏皇反〉。羸也弱也。俗文短小目尪。

玄：〈尪狂〉今作尪，同。烏皇反。尪，弱也。『通俗文』：短小曰尪。尪亦羸黒也。
〈尪羸〉今作尪，同。烏皇反。尪，弱也。羸，累也。『通俗文』：短小曰尪。尪亦小也。

(11) 芬者，方言芬，和。謂芬香和調。
玄：〈芬馥〉敷雲反。『方言』：芬，和也，郭璞曰芬香和調也。下扶福反。『字林』：馥，香氣也。

(12) 祈：〈巨衣反〉。作蘄求福也。
玄：〈所祈〉巨衣反。『字林』：祈，求福也。『爾雅』：告也。叫也。祈，祭者叫呼而告請事也。

(13) 邑者，周礼四井為邑方二里也，九夫為井方一里也。説文八家一井也。
玄：〈邑中〉『周禮』：四井爲邑。鄭玄曰：方二里也。『廣雅』：五里爲邑，十邑爲鄉。『左傳』：凡邑有宗廟先君之主曰都，無曰邑。
玄：〈市井〉子郢反。『周禮』：九夫爲井，方一里也。『白虎通』曰：因井爲市，故曰市井。『說文』：八家一井，象搆韓形，象謇形。

(14) 厲：〈力制反〉。疫厲也，人病相注也。釈名云病気流行中人也。
玄：〈疫厲〉營壁反，下又作痬，同。力制反。人病相注曰疫厲。『釋名』云：厲，病氣流行。中人如塵厲傷物也。疫，役也。言有鬼行役。役，不住也。

(15) 辜：〈古胡反〉。爾雅罪也。
玄：〈无辜〉古胡反。『爾雅』：辜，罪也。禮義之罪也。

(16) 蹇：〈居免反〉。左伝偃蹇驕傲也，広雅大嬌也，謂自高大貌也，釈名云　，偃偃息而臥不執事也，蹇跛蹇也，痛不能作事也。
玄：〈偃蹇〉居免，紀偃，巨偃三反。『左傳』：偃蹇，驕傲也。『廣雅』：偃蹇，夭撟也。謂自高大皃也。『釋名』：偃，偃息而臥不執事也。蹇，跛蹇也。病不能作事，今託似此也。撟音几小反。經文從人作僑，誤也。

(17) 猥：〈烏罪反〉。悪也，字林衆也，広雅頓也又雑也。擾者乱也。
玄：〈猥多〉烏罪反。『字林』：猥，衆也。『廣雅』：猥，頓也。
玄：〈雜猥〉烏罪反。猥，惡也。『字林』：猥，衆也。衆，雜亂也。

玄：〈勿擾〉如紹反。『説文』：擾，煩也。『廣雅』：擾，亂也。

(18) 怱：又作忽，古文忩〈之容反〉。方言征忩遑遽。
玄：〈征忩〉之盈反，下之容反。『方言』：征忩，惶遽也。
玄：〈征忩〉之盈反。古文忩，同。之容反。『方言』：征忩，惶遽也。江湖之間凡窘卒怖遽皆謂之征忩。

(19) 熙怡：説文和悦也，方言怡喜也。
玄：〈熙怡〉虚之反，下與之反。『說文』：熙怡，和悦也。『方言』：怡，喜也。湘潭之間曰紛怡，或云熙怡，經文有作嬉，同。虚之反。『說文』：嬉，樂也。『蒼頡篇』：嬉，戲笑也。嬉非今用。

(20) 廓：〈古悪反〉。爾雅大也。
玄：〈廓然〉口郭反。『廣雅』：廓，空也。『方言』：張小使大謂之廓。『爾雅』：廓，大也。孫炎曰：廓，張之大也。

(21) 暐：〈于鬼反〉。説文盛明皃也。
玄：〈暐曄〉宜作煒，于匪反。『説文』：煒，盛明皃也。亦赤也。

(22) 較：〈苟学反〉。粗略也。広雅明也見也，謂較然易見也（一六七下）。
玄：〈較之〉古文作攉，同。古學反。『廣雅』：較，明也，見也。謂較然易知易見也。經中有作挍，比挍也。
玄：〈都較〉古文攉，同。古學反。較猶粗略也。『廣雅』：較，明也。亦比校也。

4.2 重層的な構造

述文贊は仏経をより正確に理解するために編纂されたものである。その中に，仏経に関する解説のみならず，辞書の特性を持つ字音・字形・字義に関する注釈も多く存する。仏経解釈文と辞書的な解釈文の二種類を組み合わせて成立した述文贊は一般的な仏経類文献と辞書類文献とを区別できる。本節では，このような重層的な構造を持つ特徴的な編纂方針を分析する。（＿＿が諸本から引用している内容であり，～～が出典不明の内容である。）

(23) 蹉〈千阿反〉跌〈徒結反〉通俗文失躡曰跌，広雅差也，亦僪也，業報運数終不参差故，即不違之義（一六七中）。
玄：〈蹉跌〉千何反，下徒結反。蹉跎也。失躡曰跌。跌，差也。

玄：〈不跌〉徒結反。『通俗文』：失躡曰跌。『字書』：失蹐也。『廣雅』：跌，差也。『方言』：跌，蹶也。郭璞曰：跌，偃也。蹐音之石反。

この例では，前半の傍線部が玄応音義の記述と一致し，出典の順序も同じで，玄応音義から引用した内容と考えられる。波線部の記述が玄応音義にも他の文献にも見られず，仏経についての解説だと考えられる。引用内容ではなく，憬興が施した注文であると推測できる。

(24) 魯〈力古反〉孔安国云鈍也，方言何也。

玄：〈頑魯〉力古反。『論語』：參也魯。孔安國曰：魯，鈍也。論文作儜，非體也。

この例では，「方言何也」の記述が玄応音義からの引用ではなく，後で注釈された内容である。ここの「方言」というのは，出典が明記されていないので，どこの方言であるかは判定できない。

(25) 扈〈胡古反〉漢書音義曰，跋扈自縱恣也，薛綜曰，勇健貌，又作虓扈，謂縱横行也，虓人獲也，戦而俘獲也。

玄：〈魯扈〉胡古反。謂自大也，亦縱横行也。自縱恣也。『漢書音義』曰：扈謂跋扈也。

玄：〈虓扈〉力古，胡古反。謂縱横行也，亦自縱恣也，又勇健之皃也。『漢書音義』曰：扈，跋扈也。自大也。

この例では，前半は玄応音義からの引用であり，後半は薛綜の著書からの引用である。そのため，述文贊の編纂時に，玄応音義からの引用を優先し，その後，他本を参照して注を補充する。

(26) 六親者，有説父親有三母親有三合有六親，或有引世語　以申難定。応劭云父母兄弟妻子，王弼云父母兄弟夫婦，皆違持頌云父之六親母之六親。

『漢書．賈誼傳』：建久安之勢，成長治之業，以承祖廟，以奉六親，至孝也。唐顔師古注引應劭曰：“六親，父母，兄弟，妻子也。

『老子』：六親不和有孝慈，國家昏亂有忠臣。王弼注：六親，父子，兄弟，夫婦也。

この例では，「六親」についての注釈であり，諸家の説を用いて六親の定義を検討した。本例ではまず六親の定義を定めるのが容易ではないことを述べ，その後，応劭・王弼・持頌の説を例として挙げて分別する。これを見てみると，憬興が文献を網羅的に熟読した僧侶であることが明らかになった。述文贊の編纂時に，特定の文献を利用したのではなく，多数の文献を直接

的に利用する可能性がある。

次に重層的な構造の例を挙げる。

(27) 礼記＋論語

礼記三十壯有室，玄公曰，有室有妻也，蓋論語由也升堂矣，未入室也。

『礼記·曲礼上』：三十曰壯，有室。郑玄注：有室，有妻也。妻称室。

『論語·先進』：由也升堂矣，未入于室也。

(28) 玄応音義＋礼記

殆〈徒改反〉近也幾也。坐者罪也，蒼頡篇坐辜也，塩鉄論曰，什伍相連親戚相坐也。〈徒改反〉近也。『礼記』：殆將病。注云：殆，幾也。

玄：〈坐此〉慈臥反。案坐，罪也，謂相緣罪也。『蒼頡篇』：坐，辜也。『鹽鐵論』曰'什伍相連，親戚相坐。若引根本而及華葉，傷小指而累四體'是也。

玄：〈殆壞〉徒改反。『廣雅』：殆，敗也。『爾雅』：殆，危也。殆亦幾也，近也。

(29) 玄応音義＋切韻

綜，〈子送反〉，習也。陸法言切韻云，機縷也。音並同也。非此中義。

玄：〈綜解〉子送反。綜，習也，理也。『說文』：綜，機縷也。謂機縷持緯交者也。

(30) 玄応音義＋爾雅

渓亦作谿字，〈苦奚反〉。爾雅：水注川曰谿。注谿曰谷，注谷溝也。

玄：〈溪沼〉又作谿，同。苦奚反，下之遶反。爾雅：水注川曰谿。說文：沼，小池也。

(31) 切韻＋詩経＋不明

赫〈呼格反〉切韻云，赤也。毛詩云，赫赫師尹，註云，赫赫盛貌也。焜〈胡本反〉切韻云，火光也。又作煜〈由鞠反〉盛也曜也。

切韻：〈赫〉赤。呼格反。S.2071（切三）

切韻：〈煜〉與逐反火光。亦作焴。（王三）

(32) 論語＋包咸注

野人者，孔子曰，先進於礼楽謂野人，後進於礼楽謂君子也，包氏曰，謂鄙陋也，郊邑外謂郊。

論語：子曰，先進於禮樂，野人也。後進於禮樂，君子也。如用之，則吾從先進。

(33) 孝経＋不明

賴〈洛代反〉孝経曰，一人有慶兆民賴之，註云，賴，蒙也。

『孝経』：甫刑云，一人有慶，兆民賴之。

(34) 玄応音義＋不明

眄者〈眠見反〉説文邪視也，又下戾五戾反，説文恨視也，

玄：〈顧眄〉眠見反。『說文』：邪視也。『蒼頡篇』：旁視也。『方言』：自關而西秦晉之間謂視爲眄也。

(35) 玄応音義＋不明

睞〈力代反〉説文瞳子不正也，蒼頡篇内視也，傍視也。

玄：〈睞眼〉力代反。『說文』：目瞳子不正也。『蒼頡篇』：內視也。

(36) 玄応音義＋王逸

梵云，阿僧祇此云，無央数。王逸云，央尽也。説文鞅頸靼也。非此　字体也。

玄：〈無央〉於良反。梵言阿僧祇，此言無央數。央，盡也。經文作鞅，於兩反。『說文』：頸靼。非此義。靼音之列反。

(37) 玄応音義＋不明

師〈所飢反〉。四千人為軍。二千五百人為師。師十二匹馬也。五百人爲旅也。

玄：〈軍旅〉力舉反。『爾雅』：旅，衆也。『字林』：四千人爲軍，五百人爲旅也。勹車爲軍字意也。勹音補交反。

〈軍衆〉居雲反。『字林』：軍，圍也。四千人爲軍，二千五百人爲師。字從勹。勹音補交反。包車爲軍，帀自爲師，皆字意也。

(38) 不明＋切韻

戢〈堕六反〉集也摂也。陸法言切韻云，止也。

切韻：阻立反。止。阻立反。五。（切三）

4.3　直接引用

述文贊には玄応音義からの間接引用が多数存する。それ以外，出典名が明記されている直接引用も見られる。以下の諸例が玄応音義に見られず，各本からの直接引用と推測できる。

(39) 裂〈呂蘗反〉陸法言切韻云，破也。

（40）五音者即詩云，宮商角徴羽擬五行之音。今言宮商者即略挙初二也，宮者麁，商者細也。和者応也。不違冒音，故云自然和。
（41）交露者幡也。字林幡幕泫泫似垂露故，即地荘厳故。
（42）撃者司馬彪曰撃動也。
（43）玉篇云，一尋八尺也。又云，七尺此似非也。応同刃故。
（44）今唯論語，於天下無所適莫也。適親也，莫踈也。

例 43 では，玉篇の出典名を明記している。先行研究では，述文賛の成立において，玉篇を参考したと論じられている。しかし，筆者の調査によると，述文賛の内容が玉篇と一致するのは例 43 の一例しかない。また，河野（2014）では「憬興の音釈の中には『玉篇』に基づくものと確定できる例がない。『玉篇』反切との一致は見られても，それらはすべて玄応『一切経音義』或いは切韻系韻書にも同時に確認できるものであるからである。」と指摘した。それによると，玉篇から音注を引用したのは確定できない。さらに，義注においても例 43 の一例で，玉篇からの直接引用か，他本からの間接引用かも判断できない。そのため，述文賛の編纂時に玉篇を利用したことを再び確認する必要がある。

4.4　独自性の発揮

以上の例を除き，述文賛に存する出典不明の項目は次の通りである。これらの注文には出典名が記されず，また現存する文献には一致する例が見られない。そのため，現存しない文献を参照したか，憬興の独自的な注文であるかを推測できる。

（45）戈：〈居和反〉。平頭戟長　十尺六寸或六尺六寸也。
（46）汗者熱気所蒸液也〈下旦反〉，又汚〈烏臥反〉泥著物也。説文穢也。宜従初也。今言浩汗者布水貌。
（47）慴：〈倚葉反〉。畏也。攝身之貌也。
（48）掴：〈古惡反〉。亦裂也。足踰口裂也。亦折也。
（49）貯：〈竹與反〉。盛受曰貯。貯亦積也。積徳既廣。
（50）遏：〈阿達反〉。壅也。絶也。佛徳既勝妙不爲餘聖之抑遏故云無遏絶。
（51）忪：〈止容衆従二反〉。懼心亂動也。
（52）曼：〈音萬〉。及也。亦作蔓〈馬安反〉。延長貌也。非此中義。
（53）冥：〈鳴央反〉。暗昧無知也。
（54）糺亦糾：〈唐由反〉。決疑云三合繩也。非此中意。今約也限也。糺是古體也。
（55）曄〈為韶反〉華光盛也，又曄〈王輒反〉草木華貌。煥者明也，爛者文章鮮明也。
（56）苦又作恪，古文愙〈苦各反〉字林恪恭敬也……典者常也，申常道故，広雅典主也。

攬者撿之在手又取也。

5　まとめ

以上により，出典文献の検討に基づき，述文賛の編纂方針を検討した。それらの結果をまとめると，次の通りである。

①玄応音義の重視

②重層的な構造

③直接引用

④独自性の発揮

述文賛の注文においては，玄応音義を利用した例が多く見られる。また，主に注文の前半に集中しており，その後，他の出典と独自に施す注が続く。このことから，述文賛の編纂時に玄応音義を重点的に利用し，他の文献で補足することが推測できる。さらに，述文賛の注釈が重層的な構造を示している。また，これらの引用には直接引用と独自的な注文が多数存する。

（り　ないき・言語文学専攻）

参考文献

池田昌広（2012）「憬興『無量寿経連義述文賛』所引外典考」『歴史学部論集』 2

李丞宰（2008）「七世紀末葉の韓国語資料―璟興撰『無量寿経連義述文賛』の注釈を中心に」『2007 韓日国際発表論文集古代韓日言語文字』

伊藤重祥（1994）「憬興撰『無量壽經連義述文贊』特異反切研究 ── 百済漢字音の干渉を中心に ──」『口訣研究』 Vol.33

河野貴美子（2014）「善珠撰述仏典注釈書に見る漢語読解の方法 ── 憬興撰述注釈書との比較を通して ──」『東アジアの漢籍遺産 ── 奈良を中心として』勉誠出版